



Title	高校演劇を見つづけて
Author(s)	大笹, 吉雄
Citation	演劇学論叢. 2000, 3, p. 170-178
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97581
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高校演劇を見続けて

大 笹 吉 雄

こんにちは。「高校演劇を見続けて」というタイトルを付けておいたのですが、別に私は高校演劇の専門家という訳ではありません。但し、高校演劇をかなり見ている事にはなるだろうと思います。一番初めに見ましたのが、一九七〇年頃じゃないかなと思うんですけれども、そうしますと、二十年以上高校演劇を見てきた事になります。最近では三年ばかり高校演劇を拝見する機会がないのですが、しかしそれでも、私が見てきました二十年あまりの間の高校演劇は、かなり変わってきているな、という印象を受けております。

今日は高校生の皆さんもいらつしやるようですから、そのことを中心にして、お話ししたいと思うんですけれども、最初に高校演劇を見ましたのは、あれは横浜だったと思います。高校演劇というのは、御存知かもしれませんが、甲子園の、丁度今あそこで高校野球をやっておりますが、ああいうシステムになっているんですね。全国大会というの

がありまして、その全国大会に向かってブロック大会というのがその下にあって、そのブロック大会の下に各地区大会というのがあつた。その地区大会から選ばれてブロック大会に出場し、そしてブロック大会に出場した高校の中から選ばれて全国大会へ行くというような、三つの段階の選考会があります。

私が最初に行きましたのは、神奈川県の方の大会でした。そしてその後すぐに、金沢で行われました全国大会へ行つたのが、全国大会を見た初めです。それから、だいたいの全国大会を見るようになりまして、つい三年程前までずっと。私が参りました一番最近の全国大会と申しますのが、那覇で行われました。毎年のように見る機会も中にはありました。ですから高校演劇の地区大会っていうその一番最初の大会というのは、比較的に見る機会は少なかつたんですけれども、全国大会というのはかなりの数拝見したと思います。私は専門的には演劇評論ということをやっている訳

ですけれども、演劇評論というのは、要するに一般の演劇が対象で、別に高校演劇だとかそういう事ではありませんでした。そういうものを仕事にしている者の中では、高校演劇を比較的良好に見ている方だと思います。

それで、そのうち高校演劇が、現場そのもので盛んになってきまして、あれは愛知県の名古屋で行われた時の全国大会だったと思いますけれども、初めてNHKが舞台を収録しました。タイトルを今ちょっと忘れましたが、だいたい全国大会というのは夏に行われますので、八月の初め頃だったと思いますけれども、その愛知県で行われた全国大会の時に、教育テレビで、ある特集番組を組んで、私がコーディネーターのようなことをやって放送してもらったことがあります。それが多分NHKが高校演劇を撮った最初だと思います。最近ではBSで全国大会を放送しているようですから、多分皆さんも御覧になったことがあると思います。あるいは御覧になる機会が増えていると思いますけれども、つまり、NHKが収録する、あるいはBSが収録する、という風な事になってきましたのも、私なんかが丁度見始めていた、その途中からのことでした。あるいは新聞社がかなり高校演劇に関心を示すようになる。殊に東京版の朝日新聞ですけれども、全国大会の記事を載せるようになりしましたのも実は私が書いたのが最初だったと記憶し

ております。それ以来東京では少なくとも全国大会のレポートが出ております。

というように、マスコミもかなり高校演劇というものに注目し始めまして、最近では東京のグロープ座という、シェークスピア劇の劇場がありますが、あそこで高校演劇の大会がもたれたり、あるいは東京の場合ですと国立劇場で、全国大会の優秀校に選ばれた高校の舞台を集めて皆さんに見て頂くというような機会も増えている、というように一般の方々が高校演劇を見る機会がかなり増えてきていますし、あるいは新聞とTVを通して、高校演劇というものがどういうものか、という事を知る機会も増えてきていると思います。但しそうは申しましても、高校演劇という名称そのものが、そういう意味で一般的な演劇とは違うという印象を受けるし、また事実その通りでありますけれども、したがって当然、高校生以外が見るということはないようで、その所が、例えば国立劇場で行われている夏の高校演劇の大会なんかでも、もう少し一般の方が御覧になった方がいいかなあ、あるいは御覧頂けたらいいかなあ、という風に思わなくもない訳ですけれども、しかし、全体的に私が二十年あまり前から高校演劇を見はじめたときの状況からしますと、盛んになって来ているという事は事実だと思えます。そして、その間に宝塚北高校のように、高校

で演劇科を設けるという動きが出てきた。宝塚北高校の場合は走りではないかと思いますが、今ちょっと楽屋でお話を伺いますと、十三年前に演劇科というのが発足したというお話でしたから、丁度私が高校演劇を見ている途中に、宝塚北高校が出来たと、演劇科が出来たということになるんだと思います。

しかし、こういう動きが全国的にあるかと申しますとそうではなくて、かなり特殊な例ではないかという風に思います。高校が演劇科を設けるというのは、そう一般的ではない。東京の場合ですと関東国際高校というのがありまして、これは私立の学校ですけれども、ここには演劇科があります。しかし、それ以外に専門的に演劇科を設けている高校は、私は寡聞にして知りません。一般の高校が設けているというのも、専門として演劇科を設けているというのは、ないんじゃないかと思います。唯、今日お話頂きます日大鶴ヶ丘高校のように、一般高校ですけれども演劇が非常に盛んだというような所も、勿論全国的にもかなりあって、と言いますよりも、高校演劇の全国大会が毎回毎回盛んになって来ているように、その数そのものは非常に増えているんだと思います。今、丁度、地区大会からしますと二千校を越える高校が全国大会を目指してスタートする、というような状況だという風に聞いておりますので、

そうしますと、ざっと、あの甲子園野球の半分の高校が、少なくともサークル活動で演劇をやっているという風な概況になるだろうと思います。これはやはり、先程司会の方が御挨拶なさいましたように、公の教育の中に演劇というものが入っていない中で、高校野球の半分の数の高校が、少なくともサークル活動で演劇をやっているという事は、盛んだという風に言っているんだと思います。大体、四千校くらいが高校野球の場合は参加しているようですから、その半分だと考えればいいと思います。その半分の高校が、北海道から沖縄まで演劇をしている訳でして、つまり公の教育の中に演劇科がなく、そしてその現場にも演劇のコースというのがない中で、サークル活動であつたにしろ、それだけの高校が演劇というものの活動に取り組んでいるというのは、かなり盛んではないかな、という風に思うのが、私の最初に受けます印象です。

その中で、例えばどういう風に高校の演劇の現場が、私の見ている範囲ですけれども、変わってきたかと言いますと、変わってきている所と変わっていない所がある。最初に高校演劇を見た時には、見る前ですけれども、高校演劇ということに関する、これは先入観と言いましようか、既成のイメージがありまして、高校の教科書で見られるような、文部省推薦的なものばかり見せられるんじゃない

かなと、ちよつと敵わないあと思つて実は現場に行つたのです。そしたら、それとはもう丸で印象が違うというのが、私の最初の、ちよつとびびくりした事でした。つまり文部省推薦ばかりでやつてゐるんじゃない、寧ろ、文部省の側から見ると、ちよつとこれは困るなあ、というようなものの方が多いいんじゃないかという印象すら受けました。つまりその意味で非常に自由だったんですね、題材そのものが。

高校演劇と言いますと、何か一つのパターンがあつて、『夕鶴』を高校生がやつたかどうか、ちよつと私は良く判りませんが、大体ああいう感じのもの、童話劇のようなもの民話劇のようなもの、それともなければ、教育劇のようなものがやられたという風に記録を見るとなつております。榊原政常さんという、もう亡くなりましたけれども、高校演劇の非常に大きな存在の方、劇作家がいらっしゃいまして、『しんしやく源氏物語』というのが代表作ですけども、こういう方々が書かれた作品が大体やられてゐるんだらうなあと思つておりました。ところが、実際に見る高校演劇の現場というのはそういうものではなくて、私が最初に見始めた二十数年前は、いわゆる創作劇ですね、創作劇と言われるものと既成の作品というのが半々くらいでした。それから次第に、いわゆる創作劇というものの数が

増えまして、最近ではむしろ既成の作品をやる方が遥かに少ない、という事になつてゐるように思われます。そしてその創作劇の中で取り上げる作品が、生徒が書くものと、それから顧問の先生が書かれるものという風に二つありまして、二つ合わせて高校演劇の創作劇という風呼びますと、生徒が書くものと顧問の先生が書く作品というものの数の方が、遥かに既成作品を凌駕するようになりました。

私が見始めた頃の高校演劇の既成の作品の中で、一番多かったのが別役実さんの作品でした。高校演劇は上演時間が一時間という制約があるんですね。一時間を超すと、少なくとも、審査の対象になる資格を失つてしまふんです。審査の対象にならない。一時間の芝居といいますと、一般の作品からするとかなり短いということになります。大体、二時間半から三時間というのが、大人が見ると言いますしうか、一般の芝居ですから、そうすると、どうしてもそういうものを取り上げることが出来ない。一幕劇のかなり短いものという事になってきます。当然レパートリーが限られてくる訳で、その限られた中で多いのが別役さんの作品でした。それに次いで多かったのが清水邦夫さんでした。『楽屋』あるいは『いとしいとしのぶ』たれ乞食』というような作品です。そして、やがて北村想さんの作品が出てくるといふように、既成の作家のものを取り上げる時にも、

大きな傾向というのがありました。別役さん、清水さん、そして北村さん、というような比較的短い作品を書いておられる劇作家の作品を取り上げるといったようになる。

先程申し上げたように、一時間という制約がありますから、創作の場合も勿論その時間の中に収めなければいけない。そしてこれは非常に驚いた事ではあったんですけども、ストップウォッチを持っている係の方がいらつしやるんですね、幕の向こう側に。それでスタートから幕が降りきるまで、ずっとそのストップウォッチで、上演時間を計っていらつしやるんですね。そうすると、これも私が丁度見始める前でしたけれども、横内謙介という劇作家が丁度高校演劇からデビューしてきた頃で、『山椒魚だぞ』という今でも多分やられている作品だと思えますけれども、それを上演した事があったそうです。それが一時間三分だったそうです、上演時間が。その三分延びたということが高校演劇の規定からすると審査の対象外ということで、大変いい芝居だったそうなんですけれども、『山椒魚だぞ』という作品は受賞を逃したという話を聞きました。つまり上演時間非常に煩いんですね。ともかく一時間以内で収まる作品という事になりますと、既成の作品がそう多くはないという事もあって、それと同時に七十年代から八十年代にかけて、若い作家達が一齐に芝居を書き始めて、

小さな劇団がたくさん上演して行くという、世に言う「小劇場ブーム」というのが起こりました。それに乗っかって、高校の現場でも創作劇のブームというのが来たんだと思います。

その時の傾向を見ますと、いわゆる「小劇場ブーム」と言われるものと、雁行していくんですね。さつきも申し上げましたように、別役さんとか、清水さんとか、北村想さんとかの作品が多かったんですけども、やがて、つかこうへい風、鴻上尚史風、野田秀樹風、というように、その時々スポーツライトを浴びた作家の、その作風を取り込んだような作品が、高校演劇の現場でもにわかに増えました。あるいはミュージカルという形式です。最近はどういう訳だかこのミュージカルという形式が減っているんですけども、私が見始めた頃からしばらくの間は、ミュージカルというのが急に増えた時期であつたという風に思います。丁度その七十年代から八十年代にかけての、劇団四季だとか東宝を始めとするような、『キャッツ』を始めとするああいうミュージカルですね、それが観客を何十万という単位で劇場に吸引し始めた時期です。その影響もあったんだという風に思います。それでそのミュージカルが増えたということと、それからいわゆる「小劇場ブーム」と言われた若い作家達の、作風に習うような創作劇が増えてき

たというような事、そして九十年代になりますと、これもまた世に言うですけれども「静かな演劇」というものが頭角を現すようになりました。そうすると、この傾向が増えるんですね。平田オリザ風っていうのが出てくるんです。あるいは岩松了風。これが、私が見てきたここ二十年くらいの間の高校演劇の、ごく大雑把な創作劇の流れです。

つまり、実際に、東京を中心と言っているかと思えますけれども、東京を中心にする演劇の流れ、現代演劇の流れが、かなり色濃く高校演劇の現場にも、そのまんま雪崩れ込んでくるような形で芝居が上演されて行っている。そしてそれは全国的にその傾向なんです。別にどの地方がそうだということではなくて、全国的にそういう傾向が一般的に見られる。東京でやっている舞台を全国の高校生が見に来ている、という風には考えられない。にもかかわらず何故そうなるかというと、多分一つはビデオの影響があると思います。今申し上げたような若い劇団は、大体舞台をビデオにするんですね、すぐ自分達の舞台を。そのビデオは、全国的に発売されますから、別に、東京へ行ってもあ「流行ると」いう言葉で言えば「流行っている」かという事を、知ることが出来る。その影響が高校演劇の現場にも、そのままストリートな形で入って来ているんじゃない

いかな、という印象が非常に強い。

それで先程一番最初に申し上げました、つまり文部省特選のような演劇が非常に少ないという事、それよりも寧ろ、私が見た範囲で言うと、いわゆる落ちこぼれですね、学校側から寧ろ煙たく思われている生徒達、あるいは社会一般からもちよつとどうかという風に思われている生徒達の生活をドラマにしていって、というのが比較的多くてびつくりしました。そしてそこで使われているせりふというのが、かなり、露骨に、学校側を批判するような、あるいは先生を批判するようなせりふが、飛び交うんですね。それは私が、高校演劇を見る前のイメージとは全く違って、びつくりしました一つの要件です。例えば建前としては煙草はいけないということになっています、今は実際はそんなことはなくて、中学生でも煙草を吸っている人が一杯いるようですけれども、建前としてはいけない。けれども煙草を吸うシーンが出てくるんですね、そういう高校生が出てくる。しかし建前としては、高校生は煙草を吸わない事になっていますから、実際には舞台では火を点けないんですね、煙草を吸うというシーンがあるんだけれども。実際はかなりの高校生が煙草を多分吸っていると思いますよ。吸っていると思うけれども、舞台ではやっぱり、煙を吐き出す訳にはいかないというような、ちよつとおかしいというような所が、

無きにしも有らずなんですけれども、つまり煙草は一つの、象徴的なメタファーなんです、要するに高校生にとって、いけないものの一つのメタファーが煙草である。その煙草を吸うシーンが一杯出てきたりする。あるいは、援助交際なんていう言葉が無かった時代の、そういうセックスに関わる話ですね。高校生が妊娠して中絶したと、いうような話も、高校演劇の現場で、これはもうかなり見ることが出来たんです。

つまりその意味からすると、文部省特選という風なものとは違う、正に生の高校生の声なり生活なりを反映している創作ドラマというのが、一方で主流を占めていく。そして既成の作品という事になりますと、今一番スポットが当たっている作家達の作品を、高校生がすぐやる。あるいはそういう作品に習ったものを行くというような形が非常に多い。ここ二十年ばかり私が関わってきました高校演劇の現場からの印象を申し上げますと、そういう事になるだろうと思います。そして、そういう舞台を通じて私は、高校演劇が非常に面白いと思えました。非常に面白く思ったのは、最初に言いましたように、先入観を裏切られると言いましょか、いい意味でバタバタ変えていかざるを得なかった。高校演劇とはこういうものであったんだらうという風なフレームが、実際の高校演劇の舞台に接する事

によって、どんどん壊れていきました。こちら側の既成概念が、どんどんどんどん壊れていくという風なものが、高校演劇の現場を非常に活き活きとさせていた、という事だろーうと思います。

むろん一方で、オーソドックスと言いましょか、リアリティックな芝居もなくはないし、社会的なテーマをずっと抱えて、同じテーマのバリエーションをやっているという高校もなくはありません。例えば広島船入高校といいましたか、この顧問の先生が書いていらっしやるのは、ずっと原爆問題でした。それは勿論広島という土地のドラマだという事を、あるいはその先生の意識の反映だと思えますけれども、毎回出てくる全国大会の舞台が、大体原爆物という風に総括されるような、一連のドラマ、これはずっと変わらないというお話でしたから、多分私が見なくなつてからも、その高校はそういうテーマに取り組んでいるんだらうと思います。一方でそういう高校もあります。そしてその高校が、船入高校が見せてくれた舞台で、私が非常に感激したのは、タイトルを今ちょっと忘れましたが、ちんちん電車の話でした。昭和二十年八月六日に、広島市内を走っていたちんちん電車に乗っていた乗客が被爆して死んでしまう。その子供達が、自分達の親達の経験した被爆体験というものを、もう一度掘り起こしていくとい

う風な形でドラマが進んでいった、と覚えておりますけれども、それは非常に優れた、船入高校の舞台の中でも、優れた舞台であったと、今思い返しても、思います。つまり、ずっと拘っていらつしやるテーマがあって、それを繰り返して、何十年もやっていく高校も一方ではある。

そういう意味では、高校演劇というものは決して一色ではない。既成の作品もやるし、それから創作劇もやる。先生が書くものもやるし、高校生が書くものもやる。そして今風の、新しい既成の流れを受けた作品もあると同時に、何十年と変わらないテーマをずっと追っかけていく高校もあるというように、高校演劇と一言で括るのが、一つのイメージでもってこの言葉を解釈するのが、非常に現場とはギャップを感じるという風に、私には思われました。その意味で、非常に私は高校演劇というものが面白かったし、いい場合は一時間の制約時間というのが、非常にいい意味で制約になるんですね。つまらない作品を二時間も三時間も見せられたら、見ている方が堪えなくなりますけれども、一時間でパッと、優れた作品を見せてもらえると、つまらない作品を三時間見せられるよりは、遥かにこちらも活き活きとしてくるというようなことが、無きにしもあらずとして、私はその意味で、高校演劇というものの舞台的な水準というものは、一般的な演劇から比べても、極端に低い

とか悪いとかつていうことはないと思いました。

それからもう一つ高校演劇で、非常に特殊な体験をいたしましたのは、例えば身体に障害のある方、それから精神に障害のある方ですね。そういう人達を描いたドラマが、かなり見られたという事です。これも私が見た範囲で言いますと、自閉症の高校生をモチーフにしたドラマがあります。その自閉症の高校生は実際に自分がその舞台でやった、つまりプライベートな生活をその舞台にしていたようにすけれども、舞台を離れると、まるで他人とコミュニケーションが取れないというんですね。しかし演劇というフレームを与えると、その自閉症の子供は俄かに、他人とコミュニケーションが取れて活き活きするという舞台でした。自閉症に限らず、他人と接触出来ない、他人とコミュニケーションが上手く取れないという高校生を、演劇というフレームを与える事によって、会話が出来る、あるいは会話が少なくとも成立するというようなことが実際にあったという風に、伺いました。多分この辺の事は、後で議論の対象になるんだと思いますけれども、そういう具体的に、「癒し」という言葉を使いますが、その「癒し」の効果を発揮するような舞台も無くはなかった。

その意味からしましても、高校演劇というものが高校生の現実の生活感覚をかなり濃厚に反映していて、そして少

なくとも表現の上においては、それに、あれは高校演劇連盟といいましたか、その連盟そのものが、ある一つの、「検閲」という言葉を使えば「検閲」でしょうか、ここからここまではいけないんだ、というような、予め用意された制約は、少なくとも私の見た範囲では、無いという印象を受けました。これも意外なことでした。つまり、高校生というものは、こうでなくてはいけないという風な事での指導というような形が、高校演劇の現場には、少なくともそういう形では及んでいない。言い換えますと、先生がこういう風に高校生を見る、あるいはこういう風に見たいというようなフレームを通して高校演劇が作られていくのではなくて、寧ろ高校生達がこうしたいという気持ちの方を、優先させていくような舞台の作り方、というようなものが、少なくとも私が見た範囲の中では、多いなという印象を受けましたし、事実そういう舞台の方が、非常に生き活きしていて、観客に訴えるものを持っていると思います。

そろそろ時間のようなので、この辺りで取り敢えずお話を終えることにしますが、高校演劇を見る前と見た後というものは、高校演劇に対する考え方なり、あるいは接し方が変わったと、その意味で非常に劇的な体験をしていたと私自身は思っております。つまり、高校演劇に関する認識が変わってしまった。認識が変わってしまったというのは、

本質的な意味でドラマチックだと思うんですけども、その意味からすると、高校演劇を見た事によって、ドラマチックに私の認識が変わったという事が、私の個人的な体験としてあったという事を、報告してお話を終えたいと思います。ありがとうございます。